

ケダモノに蹂躪されし少女の苦悦

交易都市ミラルパは、何処の国家にも属さない独立自治都市として屹立していた。ガルメディア帝国、フエイ王国、ルサ共和国という、いわゆる「三大強国」と国境を接していたという地理的条件も相まって、ミラルパは世界交易の中心地として栄華を誇り、繁栄を極め、最盛期にはその巨億の富で世界を経済面から支配していたほどだ。この当時、内政にせよ外征にせよ、三大強国はミラルパの豊富な資金なくしては立ち行かなくなっており、財政は赤字続きで国の借金は増えるばかりとなっていた。

増えすぎた国の借金は、増税という形で国民に重くのしかかってくる。三大強国では様々な税の導入が相次いだ。所得税、取得税、贈与税、相続税、酒税、固定資産税、挙句の果てには生活必需品に多額の税金を課す「消費税」の導入が決定されると、それまで耐え凌いできた国民の怒りが頂点に達し、ついに爆発した。

市民の蜂起は三大強国でほとんど同時に発生し、帝政が崩壊し、王政が打倒され、独裁者が縛り首にされて広場に吊るされた。この混迷は一年が経過しても終息を見ず、三年が経過する頃には大陸全土に飛び火していた。

無法が唯一の法となった。大小様々な勢力が台頭し、妥協と思惑によって迎合し、あるいは分離して、欲望と信念を天秤にかけながら、敵対勢力を滅ぼし、味方を暗殺し、平和や正義といった言葉を口にする者の皮を剥いでいった。

このような異常な状況下において、交易都市として栄えたミラルパが無事に済むはずがなかった。巨大すぎる富は持たざる者の憎悪を煽る。八方から押し寄せる悪意の勢力に対して、ミラルパは城門を閉ざし、堅固な城壁に寄って抵抗を続けていたが、三大強国が減びてから五年後、ついに滅亡の運命を享受することになる。

ミラルパの最後は悲惨だった。最期まで抵抗した者は容赦なく殺され、抵

抗せず降伏した者はそれからしばらく後に殺された。子どもや老人は一ヶ所に集められて首を刎ねられて殺され、男は自ら穴を掘らされてその中に生き埋めにされた。そして女たちは、飽きるまで犯された挙句、肛門から槍を突き刺されて串刺しにされた。その死体は、白骨化するまでずっと野に晒され続けたという。

ミラルパが溜め込んでいた富はことごとく略奪された。大量の金貨や銀貨、延べ棒、様々な種類の宝石類や装飾品、高価な絵画や美術品など、金目の物は根こそぎ奪われ、かつて富み栄えた交易都市は廃墟と化して滅亡した。後に残されたのは、瓦礫と死体の山だけであり、都市上空を飛び交うカラスの大群は、しばらくの間、消えることがなかったという。

流出したミラルパの富は、まるで火に油を注ぐかのごとく、いまだ終息の兆しさえ見せない世界規模の混乱に拍車をかけた。金が持つ魔力が人々の心の隙間につけ込み、争いを煽ったからだ。結果、世界規模の混乱は、一〇〇年が経過しても収まる気配を見せず、その間、大小様々な国が興り、そして争いに敗れて滅んでいった。

このような情勢下において、激しさを増す戦禍に巻き込まれ、家や田畑を失い、難民となって流浪する者が相次いだ。彼らには行く宛もなくさ迷い歩き、生きるために手を血で染めなければならなかった。善人が悪人と化し、犯罪の件数が飛躍的に増加した。暴行、窃盗、略奪、強盗、殺人、そして婦女子への性的な暴行は、もはや日常茶飯事となり、人々は死と隣り合わせの生活を当たり前のこととして受け入れるようになっていた。

悪が悪を呼び、凄まじい勢いで悪意が増殖を始めた。この増殖する悪意につけ込んだのが、手の隙間から零れ落ちる砂粒のごとく、殺戮を免れたミラルパの残党たちであった。彼らは、自らの故郷を復活させるべく、外道に身をやつしながらも、力を蓄え、台頭する機会を伺っていた。

増殖する悪の需要を満たすことは、金と富を産みだす一大産業と化してゆく。武器の製造と販売、麻薬の取引、そして人身売買など、金を欲して止まない彼らは、自らの利益と欲望のため、悪の闇を世界に拡散し続けた。結

果、世界の混迷はますますその度合いを深めてゆき、その一方で、歴史の彼方に消えかけた勢力が復活の兆しを見せはじめた。

かつての交易都市が犯罪都市として生まれ変わったのは、ミラルパが滅亡してちょうど一〇〇年が経過する頃である。穢れた金が、再びかの地へと集まり始めた……。

続きは本編にてお楽しみください。